

打越中学校教育目標

ものごとを正しく判断し、自分から進んで行動する人になるために

- よく考え、たしかな知識を身につけよう。 (知)
- たがいに協力し、思いやりのある人になろう。 (徳)
- 健康なからだをつくり、働くよろこびをもとう。 (体)

教育目標を受けた、特別支援学級の目標

- ・ 身辺自立、基本的生活習慣の確立を図る。
- ・ 自立に向けて必要な生きる力を養う。
- ・ 心身ともに健康で、他を尊重し、情操豊かな人間性を培う。

目指す生徒像 『誇れる上級生・学ぶ下級生』

目指す学校像 『主体的に考え行動し、共に学ぶ

思いやりと笑顔あふれる学校』

目指す教職員像・生徒の学びに向かう力や一人一人の能力を最大限に引き出す教職員

- ・ 生徒の心情に共感・理解し、生徒の自己指導能力を育成する教職員
- ・ 創造性と柔軟性をもち学び続ける人間性豊かな教職員
- ・ フットワーク、ネットワーク・チームワークのある教職員

学校経営の基本方針

通常学級、特別支援学級、日本語学級の生徒が一つの学校で学ぶという特色を生かし多様性の尊重と「インクルーシブ」教育を推進し、地域社会やグローバル社会で活躍できる主体性と社会性を育成する。今年度は『主体的に考え行動し 共に学ぶ 思いやりと笑顔あふれる学校』を目指し、学校全体が一体感をもって「温かい人と人のつながり」と「ルールとマナー」の指導、支援を行い、生徒の自己指導能力及び豊かな人間性や社会性も育成する。また、学力・体力向上とともに自己肯定感や自己効力感を高め、いじめ等の問題行動に向かわない生徒を多くむために、「互いを認め、支え、高めあう集団づくり」を行う。

教育活動における自己評価 現状と課題

○総括

本校の経営方針の「主体的に考え行動し 共に学ぶ 思いやりと笑顔あふれる学校」について、約8割以上の保護者、生徒の理解のもと、学校全体で「学びあい」を軸に「主体性と社会性」を身に付け、互いに「認め合い・支え合い・高め合う」集団づくりを目指した。その際、生徒一人一人の持てる力を最大限に引き出し、伸ばすための教育活動に取り組むことができた。保護者の90%が「子供たちがよりよい学校生活を送れるように、生活目標を設定したり、きまりを守ったりする指導を行っている」と肯定的に回答し、生徒の「先生たちは、落ち着いて学習できる学級づくりに取り組んでいますか」への肯定的回答は80%で、肯定的な回答が昨年度より減少している。この結果を真摯に受け止め、原因の分析と改善に向けた取組を次年度推進していきたい。

○生徒の現状と課題

生徒の主体性を伸ばし、一人一人に寄り添う生徒理解を基本にした学校経営の下、生徒同士が互いを認め、支え、高め合う学級・学年・学校づくりに取り組み、どの学年、学級も落ち着いている。特に、行事や部活動においては、生徒が主体的に活動し、全力で取り組む姿が多く見られる。常に3年生が「誇れる上級生」という意識をもって何事にも取り組むため、下級生のよいロールモデルになっている。また、生徒会中心に生徒が決まり・ルールを考え決定する機会も増えてきている。一方で学習面において、授業では前向きに取り組む生徒は多いが、その学びを家庭学習につなげるという学習習慣が身につけている生徒の回答は約7割であった。今後は、授業の中で、学習習慣作りに向け、「学習の仕方」や「自学自習できる自分なりの勉強法」の確立を図ることを授業改善の視点の1つとして取り組んでいく。更に、学習指導の工夫を図りながら、互いに協力し合える温かみある校風を大切に、主体的に考え、行動できる生徒の育成に重点をおいた教育活動を引き続き充実させていく。

○教職員の現状と課題

今年度も全教員が校内研究のテーマに沿った授業改善に取り組んだ。委員会や行事、部活動においては、生徒の主体性や自己効力感の育成に力を注いでいる。生徒理解に基づいた意欲を高める前向きな言葉かけを積極的に行う教職員が多く、「生徒のために」を合言葉に、創造性と柔軟性をもって、教職員同士が日頃から協働することを心がけている。そのため、喫緊の教育課題に対して校内の関係する委員会を中心に組織的に対応することができている。組織的にまた、服務全般については、規律を遵守し勤務している。今後も教職員の人権意識向上のためのセルフチェックや研修等を計画的かつ積極的に行う。

○家庭・地域の現状と課題

PTA、学校運営協議会委員を中心に、行事、授業内の学習支援、資格試験の機会、生徒の見守りなど日常的に協力と支援をいただいた。生徒会執行委員やボランティア部、ダンス部をはじめ、有志の多くの生徒が、学区の小学校や地域のお祭り、地域清掃等のボランティア活動に積極的に参加するなど、地域と連携した様々な取組を行った。昨年に引き続き、今年度も地域と連携した防災授業を実施できた。地域のボランティア活動や防災授業の取組みを、今後は地域（町会等）と連携した「防災訓練」に発展させ、生徒の地域社会の一員としての意識を高めていきたい。

今年度の指導の重点

今年度は、「自立（自分づくり）」「尊重（仲間づくり）」「貢献（社会づくり）」をスローガンとして教育活動を行い、対話による生徒の主体性と社会性の育成を目指してきた。

1 これまでの取組を生かした「学び合い」と昨年度の八王子市の「GIGA スクール研究推進校」としてのICTの効果的・効率的な活

用による主体的に学習に取り組む態度を育成する魅力ある授業づくり

- (1) 各教科において、学びあいの授業形態やICT（学習用端末）の効果的・効率的な活用を通して個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目標に、生徒の『学びに向かう力』を育成する授業改善を行う。

昨年度の八王子市の「GIGA スクール研究推進校」の成果を踏まえ、今年度も年3回の講師を招いた研究授業を実施し、研究を進めた。教科ごとに日常的にICT機器や生徒の学習用端末を活用した授業を行い、相互授業参観や研修会で取組内容を共有した。85%の生徒が「学び合い」の授業に前向きに取り組んでいる。また、協働的な学習やICT機器や1人1台の学習用端末を活用した授業改善に関するアンケートの肯定的な生徒の回答が90%、保護者の回答が80%であった。学級での良好な人間関係を基盤にした落ち着いた学習環境の中で、生徒の授業への主体的な取組姿勢や対話の場面が多く見られるようになり、学力も全体的に少しずつ上昇傾向にある。次年度も今年度の成果を踏まえて、学習に苦手意識をもつ生徒への学習意欲の向上や家庭学習習慣づくりを課題として取り組んでいく。

- (2) 授業や補習等による学力に不安をもつ生徒の支援と学習意欲の向上

学習支援ボランティア等を活用した授業内の支援や放課後や定期考査前の学習会を実施し、生徒の不安を解消、意欲の向上に努めた。しかし、約3割の生徒が家庭学習の習慣ができていないという現状があり、昨年度より増加している。次年度も重点課題の1つとして捉え、引き続き家庭学習習慣作りの取組を行っていく。市の学力調査においては各学年国語と数学の平均値は上がっており、特にD層の割合は減少しており、D層の底上げには一定の成果を上げている。次年度も引き続き、学習習慣を身に付けるために、数学における少人数の基礎クラスの編成や基礎学力定着のための毎時間の取組や学習支援員の効果的な活用、放課後のマイスタールーム（自学自習教室）、基礎学力コンテスト（国・数・英）等の取組を充実させる。

2 人権を尊重し互いの良さや違い(多様性)を認め合う温かい人間関係と規範意識の醸成

- (1) 多様性の尊重とインクルーシブ教育の充実

特別支援学級（5組）の生徒の通常学級の授業に加え、行事や毎日の朝読書と学活に参加する交流活動を行っている。今年度も合唱祭の各学年合唱において、特別支援学級と通常学級の生徒と一緒にステージに立ち歌うことができた。交流クラスにおいて、日本語指導学級は他校からの通級生がいることから、日本語学級の教室の廊下に生徒の自己紹介文や出身地を示した地図等を掲示し、一体感を深める取組を行っている。本校の「共に」という教育理念が生徒に浸透し、互いを認め尊重する活動が自然と行うことができる。

- (2) あいさつの励行と思いやりと感謝の心（気持ち）を大切にする生徒の育成

生徒アンケートでは、挨拶の徹底を含め、教職員の生活指導の取り組みへの肯定的回答は95%と高水準を維持している。主体的に「いつでもどこでもだれとでもかかわること」ができる資質の向上と他者への思いやりの心の醸成、前向きで明るい学校生活のために挨拶に力を入れ、生徒会主催の近隣小学校との合同の挨拶運動にも多くの生徒が自主的に参加した。来校者や宿泊学習に関わった方から、主体的な挨拶をほめられることが多い。また、本校の生徒自身もあいさつが打越中のよさの1つとして挙げる等、あいさつについて誇

りをもっている。あいさつが日常的に交わせるようになっていて、授業や休み時間、行事や部活動などの生徒の良好な対人関係にも大きく寄与していると思われる。さらに、人との関わりの中で、日頃から生徒の他者を意識した言動への「ありがとう」という言葉かけの場面が多く見られる。このように生徒が互いを尊重し、認め合う温かい人間関係が構築されていることが落ち着いた学校生活の大きな要因になっていると思われる。次年度もあいさつや思いやりのある行動を励行するとともに、「感謝の心」を伝える大切さの指導を推進していく。

(3) 授業、道徳、特別活動等において「命の安全教育」を推進し、自他の生命尊重精神の涵養

校長講話を始め、赤ちゃんふれあい事業の取組や各教科等で「命（いのち）」の大切さについて生徒が考える指導を行うとともに、様々な場面で相手の立場に立ち「自分も他の人も大切にできる」生徒を育成する意識を持って指導してきた。他の生徒の手助けをし、仲間のことを心配できる生徒も増えている。アンケートでは、85%の保護者が「自他の大切さや認め、行動できるような道徳教育」について、肯定的な回答をしている。次年度も生活指導部を中心に組織的、計画的な指導体制を整備し、生徒の主体的行動を促し、自己肯定感や自己有用感、自己効力感を高める取組を行っていく。

(4) 一人一人の不登校生徒の状況と支援ニーズを組織的かつ的確に把握し、最適な相談・指導につなぎ、社会で生きていく力を育成する

今年度も生徒への粘り強く寄り添い、不登校の解消、未然防止に努めてきた。校内支援委員会を毎週開催し、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー、特別支援教室専門員とともに丁寧な支援と指導を行った。不登校傾向のある生徒への具体的な対応として、不登校巡回教員の活用や「チャレンジルーム」（別室指導教室）の設置など、「居場所づくり」を積極的に行った。さらに、学校だけでは対応が難しい生徒については、支援にスクールソーシャルワーカーや民生児童委員の協力もいただいた。アンケートでは、悩みについて真剣に相談に乗ってくれる（相談しやすい）との問いに生徒 85%、保護者 80%が肯定的な回答だった。

また、いじめへの対応は、生徒アンケートでは 90%、保護者アンケートでは 85%が肯定的な回答だった。今後も支援委員会と生活指導部の協働によりいじめ防止や良好な人間関係づくり、SOSを出す力の育成に取り組んでいく。引き続き、週 1 回の「学校いじめ対策委員会」の取組を充実させ、保護者、地域にいじめ防止の取組がわかるように情報発信し、連携を深めていく。今後も「配慮を要する生徒への支援は、全教職員で支援する」という考えの下、校内の委員会を中心に、配慮の必要な生徒への支援を行い、生徒の特性や状況を理解しようとする意識をもち、保護者との信頼関係をもとに、支援や関係機関につなげていく。さらに、小中一貫教育の強みを生かして学校間の丁寧な連携や引継ぎ等、きめ細やかな支援も行っていく。

3 地域運営学校として地域から信頼される学校

(1) 「あいさつを主体性につなげる」を目標にした明るいあいさつ

近隣小学校と連携し「あいさつの日」（毎月 8 日）には、小学校の校門前であいさつ運動を行い、多くの生徒が参加している。あいさつの良さを自覚し、自ら積極的に挨拶をする生徒が多くなり、「あいさつの徹底」に関して保護者の 90%が肯定的な回答をしている。全生徒が「いつでも だれとでも」良好な人間関係を築き、より明るく居心地の良い学校生活にするために、あいさつの励行を

継続していく。

(2) 『誇れる上級生・学ぶ下級生』を目指して

学校行事、委員会活動や部活動等で、生徒の主体性を育むための生徒主体の活動を重視し、保護者、地域から良い評価を得ることができた。「誇れる上級生・学ぶ下級生」について、91%の生徒が意識して行動しており、学年が上がるにつれ、上級生としての自覚ある行動が見られ、下級生のよい模範となっている。生徒の自己肯定感や自己有用感、自己効力感を高めるために生徒会、委員会活動の充実を目指し、次年度も丁寧な計画と準備を組織的に行っていく。

(3) 生徒が地域で活躍し貢献する場や地域の方々との関わりの中から学び、醸成する「ボランティアマインド」

地域行事への生徒のボランティア活動が活発に行われるようになってきた。青少対主催の地域清掃、北野フェスティバル、北野児童館イベント、町会の夏祭り等にボランティア部をはじめとする部活動単位や有志が多数参加した。

また、地域運営学校として3月に「地域防災授業」を開催し、地域と連携した防災授業を行った。今年度も中学生自身が貢献できる活動として、生徒会役員を中心にボランティア部や有志の生徒が長沼小学校で行われた地域の防災訓練に運営側で参加した。今後も地域と更なる連携を図り、生徒のボランティアマインドを醸成していきたい。

4 八王子市の部活動改革を踏まえた部活動改革の推進

(1) 八王子が発表した部活動改革の方針（①4つのカテゴリーの部活動、②特色ある部活動、③広域部活動（合同・拠点校）、④地域展開を踏まえ、本校では、部活動の現状や保護者・地域及び小学生のニーズ、地域の諸団体の中学生受け入れの可否、教職員の意向等を把握し、学校独自のロードマップを昨年度作成し、今年度、移行期間として改革を推進してきた。令和9年度の完全実施に向け、地域展開等が可能な部活動については、積極的に進め、「持続可能な部活動」として、誰にとってもよい形での部活動改革を更に推進していく。

5 小中一貫した共通スタンダードの実践

(1) 規範意識の育成や基礎学力定着のための小中学校で連続性をもった指導

今年度も、年3回「小中一貫教育の日」を設定し、教員相互の授業参観と教科ごとの分科会、「学力定着プロジェクトチーム」の協議会を実施した。また、生徒会と児童会とのグループサミット（はちおうじっ子サミットの参加及び取組）、生徒会（有志を含む）の小学校運動会のお手伝い、6年生との交流（授業・部活動体験、合唱祭参観等）を行った。引き続き、「ものごとを正しく判断し、自ら進んで行動する人」を9年間で育む生徒の姿とし、小学校との直接・間接交流を積極的に行い、「小中一貫教育」をより一層充実させていく。今年度は、小中合同の引き取り訓練等が実施できた。

6 教育環境の整備

(1) 落ち着いた教育活動のための学習環境を整備させる指導

テニスコートやバレーコート周辺の校庭整備、老朽化や破損個所の迅速な修繕や改修を行う等、校内の環境整備に努めた。また、委員会生徒による呼びかけによる環境美化の徹底、PTA と部活動生徒との1階中央玄関付近や校庭の整備を実施した。学習環境の整備への肯定的な保護者の回答は85%であった。昨年度より低い数字になっているので、校内環境の再点検を実施し、計画的に改善を進めていきたい。

7 ホームページ、校務の効率化

(1) ホーム&スクールからや学校ホームページからの情報発信により、タイムリーな情報を伝えている。保護者アンケート「学校は保護者に対して適切に情報を提供している」についての肯定的回答は80%であり、昨年よりも減少している。今後は、情報発信のタイミングや量を精査しながら適切な情報提供に努める。

(2) 校外における学校だより等のデータ配信、学校評価のWEB回答や校内におけるPC、C4th（校務支援システム）を効率良く使用した会議時間の短縮が、働き方改革の一つとして定着している。

8 その他

(1) 特別支援学級5クラス、日本語指導学級を併設する本校において、通常学級内で特別な支援が必要な生徒への対応が増えている。その中で、校内支援委員会（管理職、特別支援教室専門員、スクールカウンセラー参加）が機能し、全校での組織的な取組により関係機関との連携につながった。今後も、支援の必要な生徒へさらにきめ細やかで迅速な支援を行うために学校運営協議会、スクールソーシャルワーカー等との連携を図り、教育資源の活用を行っていく。

(2) 通常学級、特別支援学級、日本語指導学級で「一つの学校」として、一体感のある学校を意識しながら、教職員が日常的に情報交換する姿が増えている。それに伴い、優れた教育実践や指導技術を一般化し、学校全体に反映され、同僚性が発揮され、様々な課題の解決を図ることができている。